



ご挨拶

理事長 米山俊直

ニュースレター「国際京都学だより」が、いよいよ刊行のはこびとなりました。会員の皆様とのコミュニケーションの手段として、ご活用くださいますように、こころからお願いいたします。

昨年11月3日文化の日に発足してから、早いものですでに8カ月が過ぎました。幸い多くの皆様のご賛同を得て、3百余人もの方々のご入会をいただき、身の引き締まる思いをいたしております。新年早々から、毎月のタウンミーティングをまず継続して行くことにしました。5月には公開講演会として顧問の上田正昭先生の講演と同時に、臨時総会を開催して理事総数と常務理事の数の増員を決めていただきました。これはこれまでただ一人の常務理事として尽力していただいていた事務局長の負担を軽くして、常務理事会の合議によって万事を進行させようという目的のためです。

その結果、企画も常務理事会にまかされ、この秋には、森谷尅久さんを中心に「京の川」を共通テーマにして、シンポジウムの計画が進んでいます。またそのほかにもいろいろと企画があるようです。国際京都学協会はNHKふうにいえばKKK、ちょっと物騒な秘密結社とおなじですが、これも面白いと思っています。英訳と一緒に使いましょう。

京都というわが日本列島の中央の小盆地に蓄積された有形無形の文化を素材に構築された京都文明を、世界にむけて発信してゆきたい。ささやかながら底力のある組織として、会員諸氏の積極的なご参加によって本格的に充実してゆきたいと願っています。

私事ですが、去る3月に大手前大学を退職して、この協会に専念しようと思いましたが、淀川水系流域委員会の仕事などでなかなかそうは行きません。7月には英国を1週間あまり旅し、9月には国連の“国際米年”のイベントで「日本における米の価値」の講演、さらに11月には杭州の浙江大学で開催の国際シンポジウム「道教と神道」で「えびす信仰と道教」という報告の予定と、海外への旅も予定しています。

ともかく、あらゆる機会をとらえて、国際京都学協会がどのような活動を展開してゆくか、おおいに宣伝してゆきたいと思っています。

どうか、あと3カ月後には1年を迎える本協会に、これからも、これからこそ、是非ご協力を賜りますように、あらためてお願い申し上げます。

会員の皆様のご清栄をお祈りして。

(よねやま としなお)

国際京都学協会の会報創刊おめでとうございます。

京都市長 梶本頼兼

貴協会の皆様が、昨年 11 月の設立以来、「“京都力”を結集してよりよい、国際的な京都を創造する」という基本理念の下、米山俊直理事長を先頭に研究会や講演会の開催など精力的な活動を展開されておられますことに深く敬意を表します。京都は、緑豊かな山並みを三方に有し、清流賀茂川が流れる山紫水明の地であり、平安建都以来 1200 年もの間、日本の政治、文化の中心的役割を担って参りました。明治以降、政治の中心は東京に移りましたが、京都は歴史の蓄積を生かした伝統や文化、学問を守り、今でも日本の精神文化の拠り所であり続けております。

現在、京都市では、自然的・歴史的景観と伝統に育まれた文化を有する京都を国をあげて守り活かすことが、21 世紀の国際社会における日本のために必要不可欠であるとの思いから、京都創生の取組を進めています。その推進に当たっては、昨年 6 月に梅原猛先生に座長を務めていただいた京都創生懇談会から、京都が日本の伝統・文化が生き続ける世界でも稀有の歴史都市であり、その京都を国家財産として守ることを国家の戦略とすべきであるという「国家戦略としての京都創生の提言」を載いております。

京都は日本国民の財産であるだけでなく、世界の宝であり、私たちは、この京都を守り、創生し、世界に、そして未来に発信していかなければなりません。そのためには、京都を愛する全国の皆様の力を結集することが必要です。この意味において、産学公、そして市民の皆様との協力により、総合的な京都学の構築を目指される貴協会の御活動は、まさしく未来の京都、未来の日本にとって不可欠かつ大きな意味を持つものであります。この度の会報の創刊を契機に、皆様方の活動がますます発展されますことを心から御期待申し上げます。

(ますもと よりかね)



京の川

森谷尅久

夏や冬になると、いつもそう思うってしまうのだが、京都盆地特有の自然環境から生まれる酷暑と厳寒に閉口する。「どうにかならんかなあ」。「ここは京都どすえ」とは家族の者たちの言葉であるが、わかっているだけでも一度は文句もいいたくなる。

このすり鉢型環境は、京都盆地が数万年前に湖底であったところから生まれたといわれている。この京都湖は、永い間の土砂の堆積と、かすかではあるが、連続的な隆起運動で干上がった時、盆地の形成をみせ、とくに盆地の北域では三つの川がほぼ北から南へと流れをみせていたという。高野川、鴨川、桂川の三川である。この三川は淀川(澁川)に流れ込み、さらに流れは大阪湾へとそそいでゆく。淀川は現在、近畿地方の約九百河川を取り込む「河」とされ、東の利根川と共に、日本最大級の重要河川とされている。

もっとも、この淀川については、まことに興味深いのであるが、ここではこれ以上言及しない。それよりも、「京の川」といえば、やはり高野川、鴨川、桂川の三川であるが、その前に触れねばならないのは、京都湖が残した膨大な地下水とその水脈についてである。その地下水脈の足跡の一つが神泉苑とされるが、とくに京都の西南域については実に豊富な地下水と水脈が存在した。現在、この京都盆地の地下水資源については、ある研究者は、この水量を数十億トンに達すると推定している。

かくも巨大とは驚くべきであるが、この背景が、古代計画都市、平安京を誕生させた大きな理由であるとするのは是認されてよい。事実、平安京に展開された、大内裏および貴族の邸宅に池泉回遊式の大庭園が誕生したのは、この水資源がなくてはありえなかったのである。貴族ばかりでなく、一般庶民の住宅(小屋しょうおくと称した)にも、多くの井戸が存在しており、これが日常生活の営みを保障していたのであり、平安京の都市衛生を保全する上でも欠くべからざるものであった。

都市衛生の問題でいえば、地下水源に加えてさらに重要なものとして京域内を流下する中小河川の存在が大きい。この中小河川の水源については、前記の三川に連なるものが多いが、その数については明白なものはない。ただ平安京は、大路・小路に沿って「溝みぞ」が縦横に走っていた。大路・小路の「溝」は、今日での「溝」感覚より、むしろ小川に近いものである。もちろん「溝」には汚水も流れていたであろうが、流れ込む清冽な水によって、自然の浄化が著しく高かったのである。

京域内を走る大路・小路は東西で大路十三本、小路二十六本、南北で大路十一本、小路二十二本である。合計すれば大路二十四本、小路四十八本となる。とすると、「溝」も大小あるが七十二本となる。しかも「溝」は原則として両側にあるから百四十四本となる。それだけではなく、さらに各町の中心部をつらぬく「小溝」も存在するので、これを計算すると、平安京全体で三十二本となる。全ての「溝」「小溝」を合計すると、なんと百七十六本に達するのである。もって中小河川の意味は大きいと考えねばならないであろう。

ところで、平安京には巨大な大路は存在したが、「広場」と呼ばれるものはなかった。無理につくるとすれば、朱雀大路と二条大路が交差する大内裏の前は、八十五メートル道路と五十メートル道路の交差になるわけだから、かなり大きな「広場」となりうる。しかし、ここにはそんなものはない。実に不思議な都市構造をもっていたのである。それに代わるものとして自然に形成されたのが「京の川」の河原の「広場」であった。

この河原の「広場」は、しばしば合戦の場となり、平安末期には処刑場ともなっていたが、時代が下るにつれて、貴賤が群集する場として、しだいに重要視されるようになり、さらにそのことが、芸能を中心とする多数の催し物を誕生させる契機となった。鴨川でいえば、糺河原からはじまって、二条河原、三条河原、五条河原は、猿楽勧進、歌舞伎、浄瑠璃、見世物、納涼の床机の出現となり、「広場」の拡大となった。

「京の川」は、常に新しい文化の胎動を促すものとなったのである。

(もりや かつひさ・武庫川女子大学教授)



京都文化の国際的環境

井上満郎

京都人はいじわるでいけずで、保守的・排他的だとよくいわれる。確かにそうした側面はあるが、私はこの保守性・排他性は京都文化にとって決定的に重要な役割を果たしたと思っている。もし京都が外部の人や文化を何もかも全面的に受容したならば、京都文化の焦点は分散し、都市としては発展したかも知れないが、今のような深く広い京都文化はなかったと思う。適度に閉鎖性を持ち、外部の人や文化を慎重によりわけて吸収したところに京都の特質はあり、そのよりわけが時にはいじわるともいけずとも映るのである。

しかし一方で京都は、実に開明的な都市であった。すでに平安の都ができる前から、たとえば山陰の出雲から来た人と文化が京都に定着し、北区出雲路という地名にその足跡は刻まれた。滋賀県方面から進出した小野氏一族も、左京区高野あたりに住んだ。上代から地方の人と文化を京都は熱心

に受容してきたのである。

とりわけ国際的なそれは、特筆すべき質と量に達した。秦氏に代表される渡来人が朝鮮半島からやってきて、先進的な文化・文明を京都にもたらしたのである。平安京も、未開の荒野に行なわれた首都建設ではない。すでに東アジアでも先進的な文化・文明が咲き誇っていたのであり、その前提があって日本の首都の地に京都は選ばれたのだ。

明治維新に際して、京都は衰滅の危機に瀕した。首都が東京に移り人口は激減、江戸時代の三分の二にまで減った。そのままいけば京都は滅亡したであろう。

この時に発揮された知恵が驚異的である。その代表的なものが小学校で、ついこの間まで毛唐と呼び攘夷を叫んでいた、そのヨーロッパの教育制度をいち早く取り入れて日本初の小学校をつくった。もし京都がただ閉鎖的なだけなら、このような発想は起こるはずがない。自分を失うことなく国際的な文化・文明を上手に吸収したのであり、保守的、排他的と評されることの多い京都の真実は、こうした国際的視点に立ってはじめて理解することができるであろうし、私たちの使命もそこにある。

(いのうえ みつお・京都産業大学教授)

“涼しさや みやこを堅に 流れ川”蕪村

第一回研究会のご案内

「ちょっと田舎へ帰っている間に汚う汚うなって戻って来るなあ」

むかし藪入りで帰郷して戻ってきた女子衆(おなごしゅ)について、父がよく言っていたものだ。まだ子どもの私には、すぐに理解しかねたが、考えてみると京都の水が美容によいということだったのだろうか。鴨川の水で産湯を使ったと言って、京都の女性はそれを誇りにしている。

秋からの研究会は、「京の川」をテーマにして、さまざまな角度から、多くの方のご意見を集めたいと考えています。第1回は九月二十五日(土)に「京の川と歴史について」森谷尅久さんに講演いただきます。田中真澄さん、嘉田由紀子さん、今本博健さんのお話、武部宏さんが司会をします。10月第2回は「京の川と生き物」を予定しています。話者は未定。以下、「京の川とものづくり」「京の川と町屋のくらし」「京の川と広場」「京の川と芸能」などを計画しています。(やました ようぞう)